P

令和６年度 学校推薦型選抜
（きのくに教員希望枠）（地域【紀南】推薦枠）

小論文　問題冊子

注 意 事 項

1．監督者の指示があるまで，この問題冊子を開いてはいけない。

2．この問題冊子は，次の募集区分の通りである。

「学校教育教員養成課程」

3．落丁，乱丁及び印刷不鮮明なものがあれば，すぐに申し出ること。

4．すべての解答用紙に必ず本学の受験番号を記入すること。

5．解答は，問題番号に対応する解答用紙に記入すること。

6．記入した解答用紙は，裏返して机上に置くこと。

7．解答用紙の中の※の欄には記入してはいけない。

8．試験終了後，問題冊子は持ち帰ること。

1

以下は、森絵都の短編小説「ポコ」の全文です。一度最後まで通読した後、もう一度はじめに戻って、最初の２行を読みなさい（その後は必要に応じて何度読み返しても構いません）。その上で、後の問いに答えなさい。

飼い犬のポコが死んだ。
だからもう、世界がどうなったってかまわない。

その朝も、朔（さく）の心は静まり返っていた。小四の彼はまだ「諦念（ていねん）」の一語を学んでいなかったが、言葉よりも先にその実感と出会うこともある。別になくてもいいんだと休校中に気づいた学校も、あるならあるで粛々と通う。「粛々」の一語も未習ながらも、彼はもうそれを知っていた。
「ついに死者が五十万を超えたか」
食卓で黙然とトーストを噛（かじ）る朔の向かいでは、両親が憂い顔をテレビへ向けていた。
「とくにアメリカがひどいな」
「だから、早いとこアベノマスクを送ってあげればよかったのよ、トランプ大統領に」
「かもなー」
気の抜けた会話を聞き流しながら、朔が考えていたのはポコのことだ。
ポコが死んだ四日前からずっと考え続けている。

ポコは雑種の中型犬だった。齢は十八。人間ならば百を過ぎるまで病気のひとつもしたことがなかったのに、六月の頭から急に食欲を失い、荒い呼吸をするようになった。
「肺全体に腫瘍（しゅよう）が広がっている可能性が高い」
そう獣医から告げられた両親は、ポコの年齢によるリスクを考え、手術は受けさせず家で看取（みと）ることにした。
それから三週間、ポコは何も食べずに水だけで生きた。日に日に痩（や）せ衰えな

がらも立って、歩いて、家族にしっぽを振り続けた。元の飼い主に捨てられてもへこたれなかっただけあって、ポコは強い犬だった。

しかし、最後の三日間は壮絶だった。急に苦しみだしたポコは幾度となく吐き、黒い便をし、遠吠(とおぼ)えみたいな大声をはりあげた。「がんばれ、がんばれ」と呼びかけていた父の声は、やがて「十分がんばったよ」に変わった。母の目からも涙が消えた。「悲しみの向こう側へ抜けた」らしかった。

そんな人間の感情とは無関係に、ポコは七転八倒しながらも最後の最後まで生きようとし続けた。感動的なほどの粘り強さでこの世にしがみついた。まだここにいたい。まだ。まだ。まだ。そう叫んでいた目を朔は決して忘れない。

「行ってらっしゃい。気をつけてね。寄り道しないで帰っておいで。本当に気をつけて」

支度を終えた朔を、今朝も母は鬼ヶ島にでも息子を送りだすような風情で玄関まで追ってきた。コロナそのものよりも、コロナでぎすぎすした人間社会への不安があるようだ。

けれど朔は恐れていなかった。ポコをあれほどしがみつかせた何かが、きっと、この世界にはあるはずだ。

あのふんばりに値する何か。生きる真価のようなもの。

「真価」の意味もおぼろげながら、朔はそれを探す気だった。探して、きっと捕まえる。ポコみたいに強く。たとえ世界がどんなふうに変わっていこうとも。

「行ってきます」

勢いよく飛びだした少年の頭上には、厚い雲が延びる薄墨色の空が広がっていた。

（出典：森絵都（著）「ポコ」『獣の夜』朝日新聞出版、2023 年、173-175 ページ）

問１　本文２行目の「だからもう、世界がどうなったってかまわない。」が表す朔の心情について、通読前と通読後とで解釈は変わりましたか。通読後どのように解釈したかを本文中の表現に触れながら、350 字程度で説明しなさい。

問２　あなたが教師だとして、子どもの発した言葉（話したこと、書いたこと）の真意を理解するために、どのようなことに注意すべきだと考えますか。250 字程度で述べなさい。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次の４つの選択肢のうち、あなたはどれが最も公正な分配だと思いますか？

① 平等分配
② 必要性分配
③ 実績に応じた分配
④ 努力に応じた分配

選択肢の解説を少しだけ付けよう。

①平等分配とは、その名から連想されるとおり、年齢や性別、個々の能力などの個人差をすべて無視し、完全一律に分配することを指す。最もシンプルでわかりやすい分配方法であると言えよう。

ただし、このように均一に分配しようとするとき、もっとほしいという人と、逆に自分はいらないという人が出てくることも多いだろう。リンゴを皆に配りましょうと言っても、リンゴが嫌いな人にまで配ってしまってはもったいない。そんなときにまで均一に分配することが全体最適だとは誰も思わない。

そこで②必要性分配が浮上する。これは個人の必要度に応じて分配量を変化させることで、より多くの人のニーズを満たそうとする考え方だ。仮に職務上は同じ給与水準の人でも、扶養家族を多く持つ人に（扶養家族手当[1]として）少し多めに配分することは現実に行われている。少なくともこれが公正の１つの考え方であることに異論がある人は少ないだろう。

次は③実績に応じた分配だ。このあたりから分配方法はさらに現実的に、より意見が分かれる領域に突入していく。③はいわゆる成果主義に代表される分配方法で、多大な成果を上げた人は、それだけ多くの労力や費用を犠牲にしたのであり、分配はそれに応じるべきという考え方になる。

②の必要性に応じて分配する案は一見かなりフェアであるものの、分配対象者がまったく同じ量または質の仕事をしたという前提が必要になる。仮に扶養家族を持たないＡさんの報酬が多かったら、Ａさんのモチベーションはどうなるだろう。

このように②と③は反目するケースも出てくる。必要度の高い人、あるいは

貧しい人に多くの施しを与えることが人道的であると言う人もいるし、必要度とは関係なく成果や貢献度にこそ報いるべき、そうしないと人も組織も成長しない、という論理も説得力がある。

このトレードオフ[2)]を緩和する可能性を持つのが、④の努力に応じた分配である。その名のとおり、個人の努力量に応じて分配量を決定することで、③実績に応じた分配と対比されることが多い。実績は生まれ持った才能や育った環境の違いに影響される場合も多いため、③だと才能や環境に恵まれなかった人はいつまでも低い報酬に甘んじるしかない。一方、努力量は才能や環境と違い、自分で 100%コントロールできる指標になるため、フェアで公正であるという考え方になる。

さてさて、前置きが長くなったが、改めて読者の皆さんはどれを支持するだろうか？　また、どれが最も多くの人の支持を集めると思うだろうか？

実は、実際にアンケートを用いて調査した結果がある。しかも興味深いことに、(1)この調査では男女別に統計を取っている（現代日本の社会階層に関する全国調査研究：SSM 調査[3)] 研究会編『1995 年 SSM 調査シリーズ』(1998)、および佐藤俊樹『不平等社会日本―さよなら総中流』＜中公新書＞（2000）より）。

結果はこうだ。

① 平等分配：男性 5.2 %、女性 7.5 %
② 必要性分配：男性 9.8 %、女性 9.1 %
③ 実績に応じた分配：男性 30.4 %、女性 16.6 %
④ 努力に応じた分配：男性 51.2 %、女性 62.2 %

いかがだろうか？

（出典：金間大介（著）『先生、どうか皆の前でほめないで下さい：いい子症候群の若者たち』東洋経済新報社、2022 年、43-46 ページ、一部改変）

注）
1) 扶養家族手当：扶養家族を持つ従業員に対して、基本給に加えて支払われる給与。
2) トレードオフ：同時には成立しない関係。
3) SSM 調査：社会階層と社会移動全国調査。社会階層の構造変化を明らかにするために、第 1 回調査（1955 年）から 10 年毎に日本国内で行われている調査である。

問1　下線部(1)の調査の結果から読み取れることを300字程度で述べなさい。

問2　本文に挙げられているリンゴや給与の分配例以外で、「分配」の具体例を1つ挙げ、その場合に公正な分配とはどのようなものか、①～④の分配の方法を参考にあなたの考えを500字程度で述べなさい。